自ら動いて切り拓け、村上市民・地域活性化への挑戦

信越支部　2010年度「総会」

味匠毘っ川 専務取締役
国土交通省認定 観光カリスマ
吉川 真嗣 氏

きっかわしんじ／1964年新潟県村上市生まれ。1988年早稲田大学商学部卒業後、商社に勤務。1990年村上に戻り家業の鮭加工販売業「味匠毘っ川」に勤務。1998年町の活性化への第一歩となる「村上町屋商人（あきんど）会」会長に就任。2002年「チーム黒塀プロジェクト」設立。2004年「むらかみ町屋再生プロジェクト」会長に就任。同年国土交通省より「観光カリスマ」に認定。受賞・表彰歴多数。

出会いが生んだ大きな決断

城下町・村上は、古くから“鮭のまち”として知られる特色ある食文化をもつ町です。100種類もの鮭料理が伝承されています。私は、村上の中心市街地の商店街で、伝統的な鮭の加工品を製造・販売する家に生まれました。大学卒業後は商社に勤めていましたが突然、次男坊だった私に後継ぎの話が持ち上がり、父を助けたい一心で村上に帰ってきました。しかし、保守的な村上の気質が肌に合わなかった私は、商店街の活動は極力敬遠するような状態でした。

家業を継いだものの、1997（平成9）年ごろは、大型店の進出などにより、商店街が元気を失いつつあり、村上に大規模な近代化計画がもち上がっていました。地域活性化のために市が提唱し、商工会議所がこれを支持。商店街など住民の96%が、この計画を歓迎しました。

そのようなある日、東京の百貨店の出店会場で、福島県で老舗の菓子店を営む五十嵐大祐氏にお会いしました。当時、五十嵐氏は、「全国町並み保存連盟」の会長をされており、村上のこともよくご存知でした。私が、村上で進みつつある近代化計画のことを話すと、「道路の拡幅で町人地が近代化されれば、武家地と町人地の両方が残っている城下町・村上の価値がなくなってしまう。道路を拡幅して栄えた地方の商店街は一つもない。あなたがそれを食い止めなさい」とおっしゃったのです。

初めてお会いした方にわが町の一大事を知らされ、大変な荷物を担がされたと、その日の夜は眠れませんでした。商店街活動など一切してこなかった自分が、反対運動などを起こしたら、保守的なコミュニティの中で、どのような目に遭うかわかりません。しかし、このままでは、村上は大変なことになってしまう。悩みに悩んだ末、私は、「自分はどうなってもよい。これは、自分のためではなく、村上のためにやるのだ」と決意しました。

一人の「反対運動」から住民の「意識改革」へ

まず町内の会合で、大規模な近代化は大変なリスクを伴うので、見直しを考えてほしい、と意見を述べたのですが、案の定、聞き入れてもらえませんでした。それでも何とか食い止めようという焦りで、村上の近代化を今すぐにでも中止させるための署名活動を始めました。しかし、この行動は大変な非難を浴び、すぐさま撤回せざるをえなくなりました。町のために何一つしてこなかった私が、突然そのようなことをすれば、誰だって面白くありません。私自身も深く反省し、進むべき方向を模索しました。そのとき、「近代化して栄えた例はないが、地元の歴史を活かして成功している町は全国にたくさんある。村上にはその可能性がある」という五十嵐氏の言葉を思い出しました。私は、反対というような否定的なやり方ではなく、村上の価値を発見することによって、地元住民の意識も変わるのではないだろうかと考えました。

そして、村上の価値が何かを模索していたときに大きなヒントを与えてくださったのが、村上を初めて訪れた旅行者の方でした。私の店の奥に入り、古びた茶の間や囲炉裏を見たとたん、「すばらしい」とひたすら感動してくださるのです。私にしてみれば、生まれてからずっと見続けてきた日常の空間です。しかし、その様子を見て、私の中にひらめくものがありました。「これこそが、村上のよさだ。町屋の中にこそ本当の村上がある。これは村上のシンボルになる」と確信したのです。

村上の町屋は、店舗の奥に細長く生活空間が連なる独特のつくりになっています。しかし、現在では、間口の狭い正面は、アーケードやアルミサッシなどに覆われ、一見しただけでは、その風情がわかりにくいのです。すばらしいものがあっても、それを紹介しなければ、価値は発揮できません。私は、各商店が、自分たちの生活空間である町屋の中を公開するという活動を思いつき、商店一軒一軒に呼びかけを行いました。町屋の中を見学できる店舗を紹介するために、手づくりの地図もつくりました。そして、この取り組みに賛同してくださった人々と、1998（平成10）年「村上町屋商人（あきんど）会」を設立しました。

村上の老舗店が生活空間を公開するという特殊な取り組みが、テレビや雑誌、新聞などでも紹介されるようになると、町の空気が少しずつ変化してきました。1年後には、地図を手に町を歩く旅行者の姿が、ちらほら見られるようになりました。

「町屋」を村上の財産に

町屋を軸にした活動をさらに活性化させようと、全国各地での見聞をヒントに、私は、その家に伝わる古い人形を、町屋の中に展示することを提案しました。これならば、歴史ある村上に残る江戸や明治の貴重な人形と、町屋の両方を楽しんでもらえる上、すべてが“すでにあるもの”なので、新たな資金もかかりません。私は、マスコミにも働きかけ、1年をかけて準備しました。それが、2000（平成12）年3月1日から旧暦のひな祭りにあたる4月3日まで開催された「城下町村上町屋の人形さま巡り」です。

テレビの力は大きく、観光客は全国から訪れ、大盛況のうちに幕を閉じました。それまで、ほとんど外に出なかったお年寄りが、部屋に飾った人形たちを楽しそうに説明する姿も大きな話題になりました。「うちはただのボロ家だ」と言っていた人が、大勢の人々から称賛されるうちに、いつしか自分の町屋を誇らしげに語っている。自分たちの歴史に誇りをもつという気持ちが芽生えたことが、活性化への大きな第一歩になったと思います。

さらに、観光客と地元住民とのふれあいは、リピーターを増やすことにもなりました。現在では、このイベントに訪れる観光客の約6割は、リピーターの方々です。

大成功に終わった第一回「城下町村上町屋の人形さま巡り」には、村上の人口にも匹敵する3万人もの観光客が訪れました。その経済効果は、1億円以上とも言われています。一方、私たちがこのイベントにかけた費用は、地図とポスター代に雑費を加えたわずか35万円です。市の政策に反対するために始めた活動ですから、私たちは、初めから行政に頼るつもりはありませんでした。今でこそ、行政とはよい関係を築いていますが、費用面では、物品の販売などさまざまな工夫をしながら捻出しており、現在でも行政からの援助は受けていません。

さらに、年間を通じた町の活性化を目指し、春の「城下町村上町屋の人形さま巡り」に加えて、2001（平成13）年秋からは、村上に古くから伝わる屏風や道具類を町屋に展示する、「町屋の屏風まつり」も行っています。

町並みの再生

町屋のすばらしさを多くの人々に紹介するとともに、私たちは、城下町にふさわしい景観を再生する取り組みも始めました。それが、2002（平成14）年に始動した「黒塀プロジェクト」です。これは、「黒塀1枚1000円運動」として、市民から寄付をいただき、商店街に続く小路のブロック塀に、黒い板を貼りつけ、かつての黒塀の雰囲気を取り戻そうという試みです。最終的には本物の黒塀にすることが目標ですが、理想論を振りかざして何もしないよりも、自分の立場で、今できることを、まずは目に見えるかたちで実行していくことが大切だと思っています。

さらに、2004（平成16）年には、アーケードやアルミサッシなどに覆われた町屋の外観を、昔ながらの格子や板戸に戻そうという「町屋の外観再生プロジェクト」を立ち上げました。年会費として、1年で1000万円を集め、これを10年間継続すれば、1億円のプロジェクトが実現できるという発想から、10年計画で1億円の市民基金を募ったこの取り組みは、大きな話題になりました。

これらのイベントの成功をきっかけに、さまざまな立場の人たちが自分たちも輝こうと頑張り出し、町のために汗をかこうという空気が村上に漂いだしました。そして、それまでばらばらだった市役所や観光協会、温泉、商工会議所などが一体となって町の活性化に取り組むようになり、気がつくと、町ぐるみの活動になっていました。

実施前

実施後

村上のまちづくり「黒塀プロジェクト」

「信念」と「実行力」が周囲を変える

新しいことを始めるときには、必ず越えなければならない2つの壁があると思います。一つは、「成功」という壁。もう一つは、「組織」という壁です。成功させるために最も大切なのは、企画力です。資金のない私たちにとって、宣伝効果の高いマスコミは、成功するための大きな力です。楽しく、魅力あるイベントを考え、マスコミに大きく取り上げてもらうことは、非常に重要なことです。組織に関しては、私は、立ち上げの際は、本当にやる気のあるごく少人数で始めるべきという持論をもっています。どのようなすばらしい企画でも、大人数では、意見をまとめるために、ユニークな部分がどんどん削られて、結局、平凡な企画に終わってしまうからです。

しかし、私自身は、頭の固い人間です。そのために私は、この10年余りで全国300カ所くらいの町おこしの現場を巡り、勉強をしてきました。そこで得た多くの知識がヒントになり、さまざまなアイデアが生まれてきたのだと思います。人は、何かに感動し、心が動かされたとき、自ら行動を起こします。私は、自分よりもはるかに厳しい環境の中で頑張っていらっしゃる多くの方々の姿に励まされ、ここまで来ることができたと思っております。

また、私は自分がリーダーシップがあるとは思いません。「信念」と、一歩を踏み出す「実行力」でこれまでやってきました。人の幸せや地域のためを思い、ひたすら行動していれば、応援者は必ず現れます。さらに、私には、孤独と不安だけだったスタートラインから、ずっと一緒に歩いてきてくれた妻と、人に何を言われようとも「お前が正しいと思ったことをやれ」と応援してくれた両親がいました。この家族に恵まれたことも、私の最大の幸せだと思っています。

町の活性化への取り組みが始まって10年目を迎えた2008（平成20）年のアンケート調査で、近代化計画に反対する住民の数が、なんと60%に増えていました。奇跡のような数字です。市は、近代化計画を見直し、歴史を活かした町づくりに取り組もうとしています。活性化への挑戦はまだまだ続きますが、今、村上では、市民と行政が一体となって、町の発展を目指しています。